

## サークル活動紹介

### 「石川県立大学白米千枚田学生応援隊 活動紹介」

私たち白米千枚田応援隊は、石川県輪島市にある国指定名勝「白米千枚田」で、伝統的な棚田景観の保全と地域の活性化を目的として活動しています。2024年1月1日に起きた能登半島地震で大きな被害を受けましたが、地域の方々とともに少しずつ棚田の再生に取り組んでいます。

2025年4月に発足し、活動は春から秋にかけて年に数回行っており、田植えや草刈りなど季節ごとの作業を通して、自然の力強さと地域の人々の温かさを感じながら活動しています。活動を通じて、地域に暮らす方々の「棚田を守りたい」という思いに触れ、景観保全の大切さや、自然と人とのつながりを学んでいます。

今後は、白米千枚田だけではなく能登全体の復興のため、代表の交代と合わせて、名称を「能登応援隊」へ変更する予定です。メンバーは1・2年生が中心で、これからの活躍が期待されています。

写真は、今年度発足時に撮影したものです。学年や学科の異なるメンバーが初めて顔を合わせた場面であり、初対面ならではの緊張感が感じられます。右の写真は、6月に行った草刈りの様子です。多くのメンバーが参加し、田んぼに入ることに不慣れなメンバーもいましたが、次第に笑顔が増え、楽しく作業に取り組む姿が印象的でした。



## 新サークル設立紹介

### 「島根大学 地方創生・結しまね」

島根県土地改良事業団体連合会及び山王寺本郷棚田振興協議会（雲南市）から地域の保全活動に若者の応援が欲しいという依頼が当協会にあり、島根大学の学生に呼びかけ、農業、農村の応援を目的・活動内容とする学生サークル「地方創生・結しまね」を設立しました。部員は11名（女性7名、男性4名）で法文学部、生物資源科学部、材料エネルギー学部と多様な学部の学生がメンバーとなっています。

近々、当協会主催により、学生サークルと島根県土地改良事業団体連合会、山王寺本郷棚田振興協議会とで、学生に応援してもらう活動内容について協議するマッチングを行います。



## 農業農村を応援する大学生サークル」の活動状況(Instagram)

□日本グラウンドワーク協会公式Instagramにアップしています。

<https://www.instagram.com/groundworkassociationjp/>

[発行・お問合せ先等] 一般財団法人日本グラウンドワーク協会 中里

Tel:03-6459-0324

Mail:[nakazato@groundwork.or.jp](mailto:nakazato@groundwork.or.jp)

グラウンドワークとは「協働で地域をよりよくする」という意味です。当協会は、「中間支援団体」として①地域活性化、②環境保全、③福祉、④棚田保全等社会的課題解決を目的に、若者（大学生等）参加及び男女共同参画による協働を主軸にした、いわゆる「日本型グラウンドワーク」を推進しています。



## 行こうよ！水土里の旅！

たちばいようすい

### □ 立梅用水（三重県多気町、松阪市）



立梅井堰は、三重県松阪市飯南町と多気町に位置する、櫛田川から取水する歴史的な農業用水路「立梅用水」の取水堰です。

1823年に完成した立梅用水路（延長約30km）の起点であり、江戸時代の土木技術を知る上で貴重な遺構です。

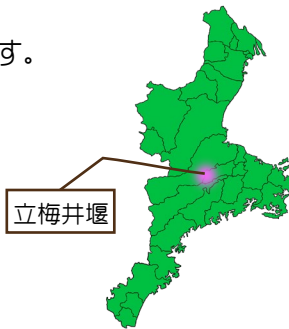
現在の立梅井堰は、1921年に4代目のものとして建設され、岩盤を砕いて作られた石張りの構造が特徴的です。灌漑用水のほか、小水力発電や防火用水など、多面的な機能を持っています。

2014年に世界かんがい施設遺産に登録されました。

#### 立梅井堰（石張堰堤）

石張堰堤のいわれは、下流の河川内に「高岩」と呼ばれる岩があり、これを砕き石張りの材料にしたと言われています。堰中央より右岸側には、木材を流す為の流木路も設けられ石積みの巧みな技術とその景観は大変優れたものがあります。

三重県香肌峡県立自然公園内にあり春は桜、秋は紅葉など四季折々のきれいな自然に囲まれ茶倉橋から見る眺めは絶景です。



## VIS N (ヴィソン)

三重県多気町にある日本最大級の商業リゾート施設です。

東京ドーム約24個分（約119万平方メートル）という広大な敷地を活かし、「癒・食・知」を軸とした約70店舗のマルシェやレストラン、温浴、ホテルが集結しています。豊かな自然の中で「いのちを喜ばせる」特別な時間を過ごすことができます。

伊勢自動車道と紀勢自動車道をつなぐ「勢和多気JCT」からすぐの場所にあり、伊勢神宮や熊野古道などの周辺観光地へのアクセスも良好です。

ぜひ足を運んでみてください！



← 松飯炭  
(マンハッタン)



## 農業土木技術一プロの仕事

農業土木に関連する企業・団体が日々の業務で取り組んでいる技術情報を紹介する「農業土木技術一プロの仕事」。今回は、ため池設計図面の三次元化事例をご紹介します。

### 1.設計や工事での3次元データの活用

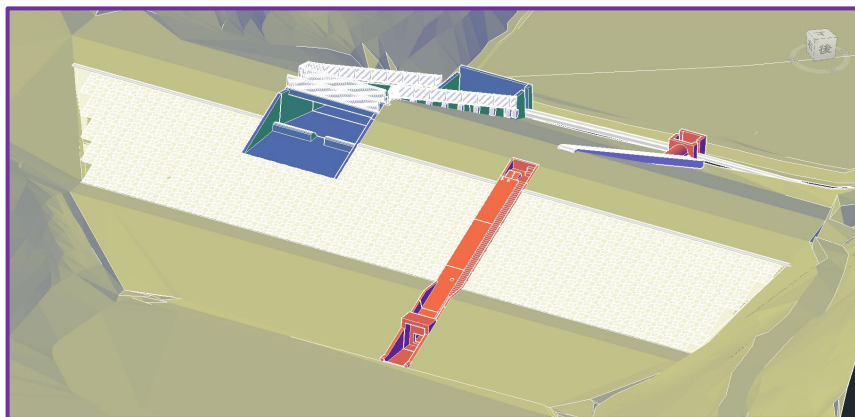
様々な構造物等の設計や工事の現場では、働き方改革関連法などもあり生産性の向上の取り組みが不可欠な状況です。農林水産省では、農業農村整備事業における3次元データ活用を推進しており、BIM/CIM※の取り組みが進んでいます。

※ Building/Construction Information Modeling Management:ビムシム

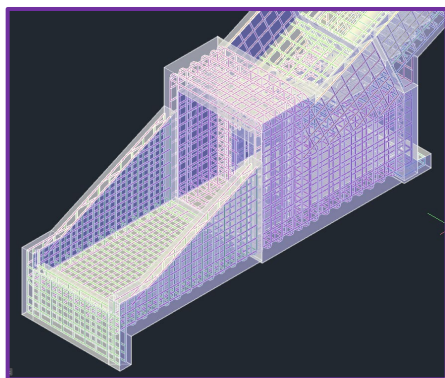
### 2.3次元データのメリット

地形とため池計画の全体関係を直感的に可視化でき、合意形成や説明性が向上します。（下写真のため池全体計画、配筋図、仮設道路など）

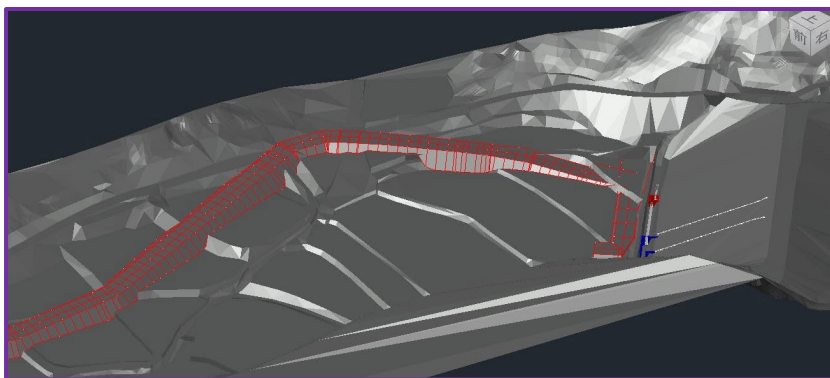
その他のメリットとしては、変更の容易性や土工数量、コンクリート数量などが図面を作成した段階で算出可能となります。また、作成した3次元データは、位置・標高データを持っているため、工事でのICT重機を使用した施工への使用も可能となります。（データ変換などの課題はあります。）



ため池全体計画（工事後の状況が分かりやすい）



配筋図（鉄筋の干渉や組み方が分かる）



仮設道路（用地境界を侵していないかなどが明確に分かる）

### 3.今後の展開

農業農村整備事業では、3次元設計データを用いた設計や工事が今後増加していくと考えられます。今回の紹介事例は、既に従来の2次元設計を行った後に現況地形と設計データを3次元化しました。現在は、測量段階からレーザードローンや地上レーザースキャナ等を用いた点群データで設計を行っています。



レーザードローン

### 「フィリピンに行って感じたこと」

神戸大学農学部 3年 神岡宏輔

僕は2月～3月にかけてフィリピンに留学しに行った。そこで感じたことをここに書いておく。フィリピンといえばどのようなイメージが思い浮かぶだろうか。恐らくバナナのイメージが大半だろう。しかし、今回僕が紹介するのはバナナではなく、フィリピン人のリアルな生活を中心に書いていく。

フィリピンの街を歩いていて感じたことがある。それはファストフード店が多いことである。マクドナルドやスターバックスなど、日本でもよく聞くものも多い。そこで現地でできた友人に、ファストフード店の利用頻度を聞いた。そうすると、日本でいうところのファミリーレストランを利用する感覚でファストフード店を利用しているという話を聞いた。日本でもよく利用されているが、日本とフィリピンでは経済状況が大きく異なる。就職するならマニラで稼ぎに行く人が多いと言われることもあるぐらい、フィリピンの人々は日本人ほどお金を持っていない人が多い。そうすると、安価で高品質な店が必要だという需要が出てくる。安価で高品質だが体には悪影響を及ぼすファストフード。フィリピンではそれらしか食べることができない状態、つまりそのようなことをしないと生きていけない状態の人々が多い状態なのではないかと推測するようになった。経済力が日本と大きく異なるのはそのような背景もあるのではないかと考えるようになった。

次に、フィリピンの人々についても感じたことがある。僕自身、この留学で様々な方と交流し、親しくなった。どの方も笑顔の絶えない素敵な方々ばかりだった。そこで僕は文化の違いについて知ることとなった。彼らは会うとハグやキスをするなど、僕たち日本人から見ると恋人のように見える間柄でも彼らの関係は友達である。フィリピンではこのようなことが当たり前のようである。そして、彼らは現地の言葉で基本的に会話をする。しかし、僕たちと会話をするときは英語を使用するのだ。ここで僕は英語って魔法のような言葉だなと感じた。極端な話、英語を習得することで世界中誰とでもつながることができるのだ。

さらに僕は、フィリピンの子供たちを見て感じたことがある。それは日本の子供たちより生き生きしているということだ。フィリピンの子供たちは公園で仲良くサッカーをしたり、廃車になったトラックにハンモックをかけ、工夫して遊んでいる姿をよく目にした。日本との財政事情の違いもあるが、どの子も幸せに見えるのだ。それに対して、今の日本の子供を取り巻く環境は年々大きく変化していつている。周りが過干渉なのか、公園でのボール遊びが禁止になるなど規制も増えていつているからなのか、スマホを使用する人が増えていつている。今の日本の子供は孤独感を感じている人も多いとよく耳にすることもあり、フィリピンの子供たちのように、自由に遊んで経験を積んでほしいと感じるようになった。

ここで言いたいことは、百聞は一見に如かず、この一言に尽きる。海外に行ったことがなかった自分だが、実際にいくことでしかわからないことも多くあった。これを機会に様々な国へ行き、知見を広げたい。